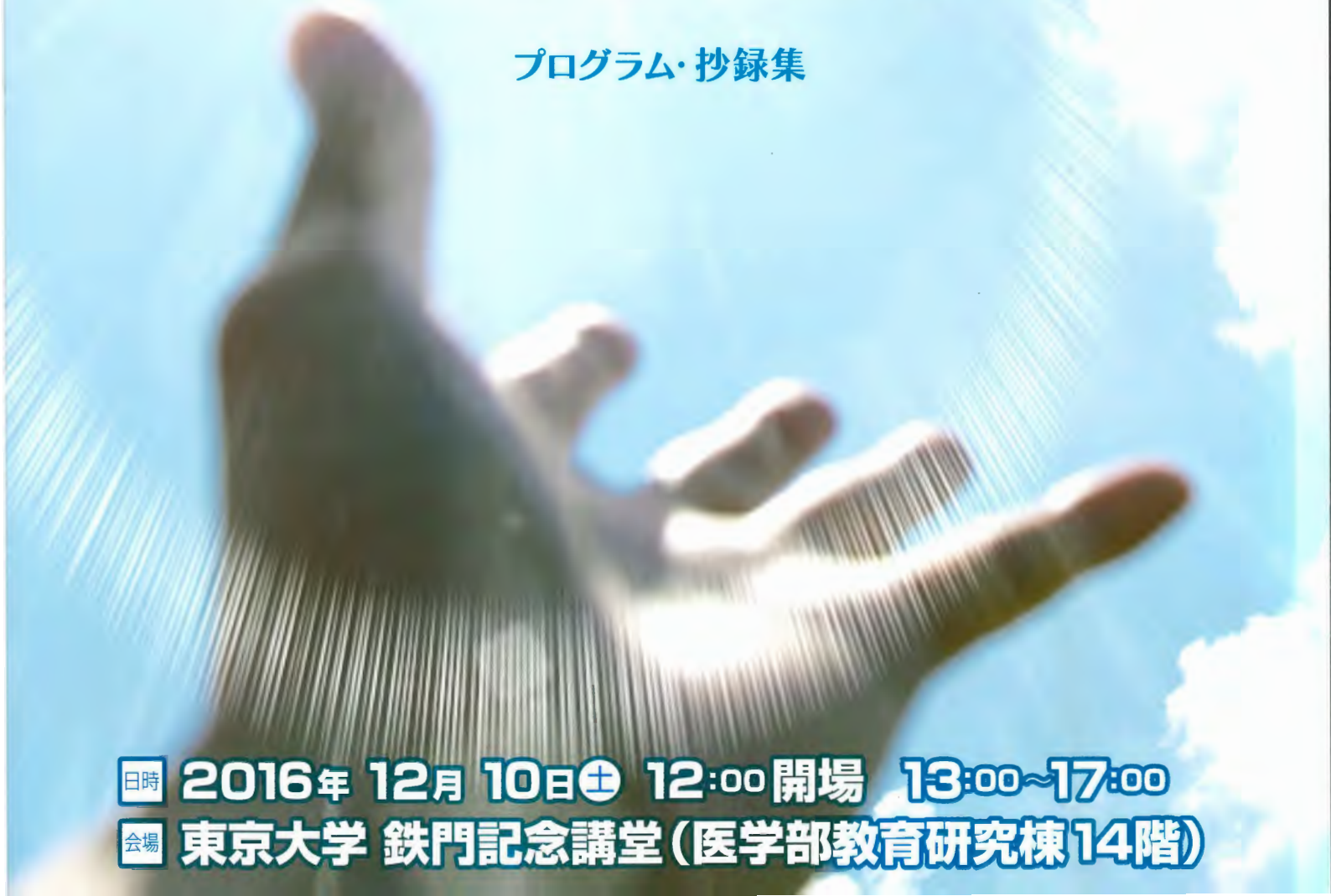
第4回生存科学シンポジウム

生の豊かさと貧しさ

～21世紀の生存を考える～

プログラム・抄録集



日時 2016年 12月 10日(土) 12:00開場 13:00～17:00

会場 東京大学 鉄門記念講堂（医学部教育研究棟14階）

第４回生存科学シンポジウム

生の豊かさと貧しさ

～21世紀の生存を考える～

日　時
2016年12月10日(土) 13:00 ～ 17:00

会　場
東京大学 鉄門記念講堂

プログラム

13:00～13:05　開会の辞 ..... 小泉 英明

13:05～14:05　基調講演 いのちの尊さを見失う「科学」... 島薗 進

14:05～14:15　休憩

（総合司会：松下正明・丸井英二）

14:15～14:55　「当事者主権」と死の自己決定..... 上野 千鶴子

14:55～15:25　21世紀の終末期を支える
－在宅医療の実践から見えてきた死生観と知恵－..... 武藤 真祐

15:25～15:55　子どもの生の豊かさをめざして..... 安梅 勅江

15:55～16:05　休憩

16:05～16:55　パネルディスカッション

16:55～17:00　閉会の辞 ..... 笠貫 宏

第４回生存科学シンポジウム開催にあたり

2016年、「パナマ文書」、「EU離脱」、「トランプ現象」はグローバル社会に大きな衝撃をもたらしました。複雑化する格差社会において、自由、民主、公平、人権などの人間の尊厳に関わる価値観は急速に多様化し、混迷を深めています。SNSなど真偽や善悪が混在する膨大な情報によって、多くの人は未来への不安、人類の危機を実感しているのではないでしょうか。

生存科学とは、46年前に故武見太郎先生が提唱された「ひとり個人の生存のみならず、同時代の地球上のすべての人びと、そして世代を超えて、人類のより健全な、より人間らしい生存を目標として、既存の科学、それも自然科学のみならず社会科学、人文科学、さらには哲学・宗教・芸術までをも含めた全人間的知識の見直しと統合を科学的に行おうとする学問体系概念モデル」です。生存科学は21世紀に生きる人類が抱える多くの課題への解決を可能にする学問領域だと思います。

生存科学公開シンポジウムでは、これまで、「21世紀の生存科学を考える」、「未来からの反射」、「未来へ架ける橋」をテーマに取り上げました。今回は「生の豊かさと貧しさ」です。

医学の進歩により、新生児死亡率は激減し、平均寿命は延長しましたが、今、喫緊の課題は“幸せに生きる”とは何かを考え、追求し、実現することです。豊かさと貧しさは対義語として用いられますが、物質的な捉えかたと精神的な捉え方があるため、同じ事象でも異なる意味を持ちます。今年4月来日された「世界一貧しい大統領」と知られるホセ・ムヒカ前ウルグアイ大統領の講演で、「日本人は幸せですか」という問いかけに戸惑いを感じた人もいると思います。先進国では経済的豊かさが心の豊かさをもたらさないという「幸福のパラドックス」が注目されています。日本はGDP世界3位の経済大国でありながら、国連幸福度は46位、GNH（ブータンが提唱する国民総幸福量）は127位であり、先進国の中でも幸福度は低く、特に高齢者の幸福度が低いのが特徴です。またOECDによる「相対貧困率」「子供の相対貧困率」が先進国の中でも高いとされています。2000年には「成長戦略」で我が国の幸福度指標作成が謳われましたが、経済学・公共政策学・社会学・心理学・宗教学など学際的な研究は緒に就いたばかりです。

本シンポジウムを通じて、少子超高齢社会において、自らの問題として心の豊かさを考え、よく生きる設計を考えて頂きたいと思います。

シンポジウム実行委員長
笠貫 宏

シンポジウム実行委員会

公益財団法人 生存科学研究所

本研究所は、急速な科学の進歩により生じる新たな危機から人類をまもるため、凡ゆる領域から総合的に『生存』問題に取り組む研究所として、医師会会長を長く務めた故武見太郎先生により1984年に設立されました。その活動はホームページ(http://seizon.umin.jp)に掲載されています。

会員は生存科学に関する自主研究を様々な視点から行い、講演会、シンポジウム、あるいは学術誌「生存科学」を通じ、広く一般の方々とその成果を共有するよう努めております。

高桑栄松先生

高桑基金

日本経済全体が先の見えない闇に包まれていた2011年、生存科学研究所も設立以来の厳しい経済状況に直面しておりました。そのような窮状の中、故高桑栄松(たかくわ えいまつ、1919年～ 2016年5月4日　北海道大学名誉教授、元参議院議員)会員は、「生存科学」という新しい学問分野をさらに発展させるためにご寄贈くださいました。

生存科学研究所ではこの貴重な寄付金で高桑基金を創設し、広く、一般社会に英知の結晶である『生存科学』のシンポジウムを開催することといたしました。

公益信託 武見記念生存科学研究基金

当基金は、故武見太郎(たけみ たろう、1904年8月7日～ 1983年12月20日)先生が創造した生存科学の普及・発展を図ることを目的に1982年9月に生存科学研究基金設定準備委員会により設立されました。

爾来、当基金は、人類の将来を展望し、ライフサイエンスを中心としてそれに関連する人文科学及び社会科学を加えて総合的に「人類の生存」を考究する「生存科学」の確立と推進を目的に『武見記念賞』および『生存科学武見奨励賞』を創設し、生存科学とその関連分野で顕著な業績をあげた研究者または実践者の顕彰に取組んで参りました。

故 武見太郎先生

実行委員

笠貫　宏
Hiroshi KASANUKI, MD

略　歴

1967年、千葉大学医学部卒業。東京女子医科大学循環器内科学講座主任教授(1997年)、同大学付属日本心臓血圧研究所所長(2001年)、早稲田大学理工学術院教授(2009年)、東京女子医科大学学長(2013年)を経て、現在早稲田大学特命教授。レギュラトリーサイエンス学会理事(2015年度会長)、日本臨床試験学会理事、日本循環器心身医学会理事長、日本蘇生協議会最高顧問、日本性差医学医療学会理事、武見記念生存科学研究基金運営委員長など。

小泉　英明
Hideaki Koizumi

略　歴

東京大学教養学部基礎科学科卒業(1971)。同年株式会社日立製作所入社。東京大学に博士論文を提出し理学博士(1976)。日立製作所基礎研究所所長、同社研究開発本部技師長を経て、2004年から同社役員待遇フェロー。公益社団法人日本工学アカデミー上級副会長、東京大先端科学技術研究センター客員教授を経てボードメンバー、中国工程院外国籍院士・東南大学栄誉教授。この間、カリフォルニア大学ローレンス・バークレー研究所客員物理学者、東京大学総合文化研究科他の客員教授、国立環境研究所監事、日本神経科学会並びに日本化学会他の理事、第55代日本分析化学会会長などを歴任。大河内賞(3回)・科学技術庁長官賞(2回)・日経ＢＰ技術賞大賞、日本化学会賞、中国政府友誼賞他受賞。ローマ法王庁科学アカデミー創立400周年記念にて招聘講演。

小島　静二
Seiji KOJIMA

略　歴

1976年、日本歯科大学歯学部、卒業。1980年、日本歯科大学大学院博士課程「歯科理工学」修了。三井物産(株)本社・健康管理室、入局。1984年、小島歯科クリニック(銀座)開院。1986年、毎日新聞社・毎日グラフ、編集委員。2002年、小島びじゅつ室・企画室、主宰。2011年、小島歯科クリニック(雪谷)開院。

松下　正明
Masaaki MATSUSHITA, MD, PhD

略　歴

東京大学医学部卒業(1962)、都立松沢病院医員(1966)、東京都精神医学総合研究所副参事研究員(1973)、横浜市立大学医学部教授(精神医学講座)(1986)、東京大学医学部教授(精神医学講座)(1990)、東京都精神医学研究所所長(1998)、都立松沢病院院長(2001)、東京都健康長寿医療センター理事長(2009)

丸井　英二
Eiji MARUI

略　歴

昭和47年東京大学医学部保健学科卒業。昭和52年、東京大学大学院医学系研究科博士課程(疫学専攻)修了後、東京大学医学部助手(疫学講座)、東京大学医学部講師(国際交流室)を経て、昭和61年より2年間、米国ハーバード大学公衆衛生大学院研究員(国際保健)。平成3年、東京大学教授(留学生センター・国際保健学大学院(国際疫学)兼任)、平成8年、国立国際医療センター研究所・地域保健医療研究部 部長。平成12年、順天堂大学医学部公衆衛生学教室・教授。平成24年、人間総合科学大学人間科学部教授。現在に至る。専攻領域は、疫学、医学史、国際保健、地域保健、保健医療情報システム研究。現在、厚生労働省 厚生科学審議会感染症部会 新型インフルエンザ対策に関する小委員会など。

基調講演

いのちの尊さを見失う「科学」

島薗　進

Susumu SHIMAZONO

東京大学名誉教授・上智大学大学院実践宗教学研究科教授・同委員長

略歴

1972年　東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
1977年　同大学院博士課程単位取得退学、筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）
1981年　東京外国語大学外国語学部日本語学科助手。専任講師、助教授
1984年8月 - 1985年7月　カリフォルニア大学バークレー校に留学（フルブライト奨学金）
1987年　東京大学文学部宗教学・宗教史学科助教授
1994年1月　東京大学文学部宗教学・宗教史学科教授
1995年-2013年　東京大学人文社会系研究科教授
1996年3月 - 1996年5月　シカゴ大学宗教学部客員教授
1997年11月-1997年12月　フランス社会科学高等研究員招聘教授
2000年6月-2000年7月　テュービンゲン大学日本文化研究所客員教授
2006年3月-2006年 4月　カイロ大学文学部日本学科客員教授
2011年 3月　ヴェネチア・カフォスカリ大学日本学科客員教授
2013年　東京大学名誉教授
2013年　上智大学神学部特任教授（2016年3月まで）・グリーフケア研究所所長
2015年　上智大学モニュメンタニポニカ所長（兼任）
2016年　東京大学名誉教授・上智大学大学院実践宗教学研究科教授・同委員長

主な著書

- 『現代救済宗教論』青弓社、1992年、新装版2006年
- 『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット、1992年
- 『オウム真理教の軌跡』岩波ブックレット、1995年
- 『現代宗教の可能性―オウム真理教と暴力』岩波書店〈叢書現代の宗教〉、1997年
- 『〈癒す知〉の系譜―科学と宗教のはざま』吉川弘文館、2003年
- 『いのちの始まりの生命倫理―受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社、2006年
- 『国家神道と日本人』岩波書店、2010年
- 『日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ』朝日選書、2012年
- 『つくられた放射線「安全」論　科学が道を踏みはずすとき』河出書房新社、2013年
- 『日本仏教の社会倫理』岩波書店、2013年
- 『倫理良書を読む　災後に生き方を見直す28冊』弘文堂、2014年
- 『宗教・いのち・国家　島薗進対談集』平凡社、2014年
- 『いのちを"つくって"もいいですか? 生命科学のジレンマを考える哲学講義』NHK出版 2016
- 『宗教を物語でほどく』NHK出版 2016

科学こそが尊いいのちの真実を見抜く力をもっている、そう考えられた時代もあった。ところが、科学の資源利用の力が過信され、それによっていのちの尊さを見失う結果をもたらしていないか。現代科学は経済的富や国家の力を増大させるための手段として捉えられる傾向が強まっている。政界や財界がそのように考え、官界、メディア、そして学界がそれに服するようになる、こうした傾向が強まっており、科学が本来の「真実を探求する知の営み」としての性格を薄めているのではないか。生命科学の発展が人間の生活を支える価値観の根幹を脅かす可能性がある。ゲノムの解読や遺伝子操作、再生科学の発展によっていのちを“つくる”科学への懸念も高まっている。こうした議論において世界的にはカトリック教会の発言力が大きい。科学の制御において、世界をリードしている感があり、大いに敬意を払うべきものだ。しかし、日本においてはやや異なる死生観、価値観があって、「いのちの尊さ」についての見方がずれる場合もある。日本の文化を踏まえ、現代科学の混迷をとらえ、是正するための議論の深化に貢献するべきときだろう。

「当事者主権」と死の自己決定

清水梅子撮影

上野　千鶴子

Chizuko UENO

社会学者・立命館大学特別招聘教授・東京大学名誉教授・
認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長

WAN　URL　http://wan.or.jp/

専門研究分野・活動

1948年富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了、平安女学院短期大学助教授、シカゴ大学人類学部客員研究員、京都精華大学助教授、国際日本文化研究センター客員助教授、ボン大学客員教授、コロンビア大学客員教授、メキシコ大学院大学客員教授等を経る。1993年東京大学文学部助教授（社会学）、1995年から2011年3月まで、東京大学大学院人文社会系研究科教授。2011年4月から認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長。

専門は女性学、ジェンダー研究。この分野のパイオニアであり、指導的な理論家のひとり。高齢者の介護問題にも関わっている。

表彰

1994年『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）でサントリー学芸賞受賞。

2012年度、朝日賞受賞。

著作等

『上野千鶴子が文学を社会学する』（朝日新聞社）、『差異の政治学』『生き延びるための思想』（岩波書店）、『当事者主権』（中西正司と共著、岩波新書）、『ニーズ中心の福祉社会へ』（中西正司と共編、医学書院）『岩波シリーズ　ケア　その思想と実践』（共編著、全6巻、岩波書店）、『世代間連帯』（辻元清美と共著、岩波新書）、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』（平凡社）、『老いる準備』（学陽書房）、『おひとりさまの老後』『男おひとりさま道』（法研）、『ひとりの午後に』（NHK出版）、『女ぎらい』（紀伊國屋書店）、『女は後半からがおもしろい』（坂東眞理子と共著、潮出版）、『結婚帝国』（信田さよ子と共著、河出書房）、『不惑のフェミニズム』（岩波現代新書）、『ケアの社会学』（太田出版）、鼎談『フェミニズムの時代を生きて』（岩波現代文庫）、『現代思想　総特集　上野千鶴子』（青土社）、DVDブック『生き延びるための思想』（講談社）、『ナショナリズムとジェンダー』（岩波現代文庫）、『生き延びるための思想』（岩波現代文庫）、『快楽上等』（幻冬舎）、『みんな「おひとりさま」』（青灯社）、『上野千鶴子が聞く　小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？』（朝日新聞出版）『身の下相談にお答えします』（朝日新聞出版）『<おんなの思想>　私たちはあなたを忘れない』（集英社インターナショナル）『女たちのサバイバル作戦』（文藝春秋）、『ニッポンが変わる、女が変える』（中央公論新社）、『上野千鶴子の選憲論』（集英社新書）など著書多数。近刊に『何を怖れる』（岩波書店・共著）、『老い方上手』（WAVE出版・共著）、『ケアのカリスマたち　看取りを支えるプロフェッショナル』（亜紀書房）、対談集『思想をかたちにする』『セクシュアリティをことばにする』（いずれも青土社）、『非婚ですが、それが何か？』（ビジネス社・対談集）。『おひとりさまの最期』（朝日新聞出版）、最新刊に『上野千鶴子のサバイバル語録』（文藝春秋社）。

障害者自立生活運動のカリスマ的リーダー、中西正司さんと共著で『当事者主権』（岩波新書、2003年）という本を書いた。たとえ要介助（要介護）になっても、「自分のことは自分で決める」という社会的弱者の自己決定権を主張したものだ。おかげで「当事者主権」という概念は、障害・高齢者福祉業界に広く流通し、定着するに至った。それと同時に、生き方の自己決定ができるなら、死に方の自己決定もできるのではないか、という問いにさらされるようになった。他方、日本尊厳死協会等が推進する「事前指示書」のキャンペーンとあいまって、高齢者の死に当たって、過剰な医療的介入を避けようという動きがある。その動きは稀少な医療資源を誰に優先的に配分するかという「トリアージ」の議論や、医療・福祉への国策的な費用抑制とも連動している。昨今、高齢者自身よりも、家族の意思が優先されがちな現場において、高齢者支援の要は、高齢者の「意思決定支援」だとする了解が成り立ちつつあるが、その「意思決定支援」は、「事前指示書」を書くように勧めるという「死の自己決定」に短絡されかねない。そこには「尊厳死」の名のもとに、「生きるに値しない生命」を選別する見方がある。相模原市の施設での連続殺人事件がもたらしたショックに見るように、「内なる優生思想」はなくなっていない。「当事者主権」の概念を、どうすればネオリベ的（新自由主義的）な自己決定を区別すればよいのか。また「尊厳生」を、費用対効果を前提とする効率主義から、どうやって「生の豊かさ」へと救い出せるのか。それを考えてみたい。

21世紀の終末期を支える ～在宅医療の実践から見えてきた死生観と知恵～

武藤　真祐
Shinsuke MUTO

医療法人社団鉄祐会 理事長／
Tetsuyu Healthcare Holdings Pte Ltd. Co-founder）

略歴

1996年東京大学医学部卒業。2002年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。2009年早稲田大学大学院ファイナンス研究科修了（MBA）。2014年INSEAD Executive MBA。☒東大病院、三井記念病院にて循環器内科、救急医療に従事後、宮内庁で侍医を務める。その後マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、2010年、在宅医療を提供する「祐ホームクリニック」を設立した。（2011年に法人化し、医療法人社団鉄祐会となる）震災後の石巻において、在宅診療所祐ホームクリニック石巻、および石巻医療圏 健康・生活復興協議会を立ち上げ、被災後の医療支援、生活支援に取り組む。在宅医療介護の情報連携においては、総務省等省庁事業としてICTプロジェクトを指揮した。2015年には、シンガポールで「Tetsuyu Home Care」を設立し、同年8月よりサービス開始している。
東京医科歯科大学医学部臨床教授、厚生労働省情報政策参与。

超高齢社会である日本において終末期をどう過ごすのかは多くの人にとって身近であり、かつ重要な問題である。「終わりよければ全て良し」とはよく言ったものだが、人生で成功を収めた人が必ずしも幸せな最期を過ごせるとは限らない。過半数の日本人が最期は自宅で過ごしたい、と願っている。しかし、現実はおよそ1割の人しかその願いを実現できていない。超高齢社会とはすなわち多死社会である。人はいきなり死ぬのではない。寿命と健康寿命の差は男性で9.02年、女性で12.40年と言われる。およそ10年は誰かに介助されて過ごさないといけない。日本は少子化問題も抱える。介助してくれる人材も減っているのだ。そして高齢者は独居や高齢夫婦二人暮らしが7割ぐらいとなり、孤独な高齢者が増える。つまりこれからは「最期をどう過ごすか、特に介護が必要な時期をどう幸せに過ごすか、過ごせるか」が大きなテーマとなってくる。

私は東大病院などの急性期病院に循環器内科医として勤務したのちにマッキンゼーに行った。これはマネジメントを実践で学ぶにはマッキンゼーは最適な場所であると考えたからである。結果としてこの判断は間違っていなかったが、むしろより学んだことはアントレプレナーシップであった。そして2010年に文京区で在宅医療を提供するクリニックを開業した。コンサルタントや制度設計の立場ではなく実践者として、高齢者が望むような終末期をデザインしたいと思ったからである。そして現在は都内に4つ、宮城県石巻市に1つのクリニックを展開している。30名の医師で約1000名の高齢者を訪問し、患者・家族に寄り添う終末期のデザインを目指している。東日本大震災後の石巻においては医療・介護だけではなく生活支援まで含んだプラットフォームを構築してきた。

我々はこれら全ての活動において、ICTを最大限に活用している。常に医師が移動している在宅医療の現場において、ICTは病院医療よりも価値を発揮する。さらに複数の職種、機関が一つのチームとして在宅医療・介護を提供するエコシステムにおいてICTは適切に使用されれば想像以上の力を発揮する。この取り組みを私は実践の場で構築してきたが、どれも医師会や行政の支援なしには不可能であった。多くの人に指示されないとプラットフォームは構築できないことを身にしみて学んできた。そしてそれらの学びを得て、2015年にはシンガポールでもホームケアの提供を開始したのである。日本で構築したICTシステムをベースに新たにより包括的なシステムを開発した。2016年にはデバイスやロボットをこのプラットフォームに実装して病院、老人ホームなど複数パートナーと実証を開始している。

今回のシンポジウムではこれらの活動をご紹介したい。

子どもの生の豊かさを求めて　―だれもが主人公、新しい共生のかたち―

安梅　勅江
Tokie ANME

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

専門研究分野・活動など

専門：発達保健学

国際保健福祉学会会長　日本保健福祉学会会長　子ども学会理事

略歴

1984年　東京大学医学部保健学科卒業

1989年　東京大学医学系研究科大学院博士課程修了　保健学博士

1990年　国立身体障害者リハビリテーション研究所　研究員

1994年　米国社会サービス研究所　客員研究員

1999年　イリノイ大学　客員研究員

2001年　浜松医科大学　教授

2006年　筑波大学大学院　教授

主な著書

1）いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学　北王路書房　2014

2）子育ち・子育てエンパワメント：子育ち環境評価と虐待予防
日本小児医事出版社　2009

3）エンパワメントのケア科学　医歯薬出版　2004

4）コミュニティ・エンパワメントの技法　医歯薬出版　2006

5）子育ち環境と子育て支援　勁草書房　2005

6）気になる子どもの早期発見と早期支援　日本小児医事出版社　2009

7）保育パワーアップ講座　基礎編／活用編／応用編　根拠に基づく支援
子どもたちのすこやかな成長のために　日本小児医事出版社
2007　2008　2012

子どもの生の豊かさの実現には、エンパワメントに基づく実践が欠かせない。エンパワメント（湧活）とは、人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい、生きる力を湧き出させることである。人は誰もが、すばらしい力を持って生まれてくる。そして生涯、すばらしい力を発揮し続けることができる。そのすばらしい力を引きだすことがエンパワメント、ちょうど清水が泉からこんこんと湧き出るように、一人ひとりに潜んでいる活力や可能性を湧き出させることが湧活である。

保健医療福祉などの実践では、一人ひとりが本来持っているすばらしい潜在力を湧きあがらせ、顕在化させて、活動を通して人びとの生活、社会の発展のために生かしていく。また、地域や病院、企業などの組織では、構成員一人ひとりに潜んでいる活力や能力を上手に引き出し、この力を一人ひとりの成長や組織の発展に結び付けるエネルギーとする。これが組織、集団そして人に求められるエンパワメント（湧活）である。

副題は「だれもが主人公、新しい共生のかたち」とした。エンパワメントは、一人ひとりが自分の人生の主人公となり、他者との違いを楽しみながら、共に生きる喜びを感じる社会を実現する手法の一つである。共生とは、ただ一緒に生きるという意味ではない。仏教用語で「ぐうしょう」と読み、互いを刺激しあいながら共に生きるという意味を持つ。ただし仏教用語としての共生は、一般に使う用法とは少し違う。「自分で存在すること」である「自生（じしょう）」、「他のものによって生じさせられること」である「他生（たしょう）」に対して、「共生（ぐうしょう）」とは、自生と他生が合わさった事態、つまり自分で存在しながら、それと同時に他のものによっても生じさせられていることを指す。互いに相手があることで自分の存在の意味が明らかになり、相手があってこそ自分が認識できる。社会脳研究に通じる概念である。

エンパワメント科学は、plasticity（可塑性、しなやかさ）、diversity（多様性）、holistic（全体性）のたまものである。なぜなら自分と環境を変える力がplasticityであり、それはdiversityの中でより加速され、holisticな営みとして統合されるからである。子育ち、子育て実践に携わるプロには、自分エンパワメント self empowerment、仲間エンパワメント peer empowerment、組織／地域エンパワメント community empowermentを相乗的に活用する技術が求められる。子どもの生を豊かにするエンパワメント実践を効果的に展開するにはどうしたらいいのだろうか？　本講では理論に加え、さまざまな実践と研究成果を紹介する。

参考文献

1) いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学　北王路書房　2014

2) 子育ち・子育てエンパワメント：子育ち環境評価と虐待予防　日本小児医事出版社　2009

3) エンパワメントのケア科学　医歯薬出版　2004

4) コミュニティ・エンパワメントの技法　医歯薬出版　2006

メ　モ

これまでの生存科学シンポジウム

第1回生存科学シンポジウム

21世紀の生存科学を考える

2013年12月14日(土)

学士会館 大講堂

基調講演　養老 孟司：21世紀の生存科学を考える

講演1　青木 清：生存科学をどう捉えるか

講演2　小泉 英明：生存科学と教育について

講演3　山下 俊一：東日本大震災から生存を考える

第2回生存科学シンポジウム

未来からの反射

2014年12月13日(土)

大手町サンケイプラザ4階ホール

基調講演　髙久 史麿：医の現在と未来

講演1　濱田 篤郎：疫病は警告する

講演2　松下 正明：認知症医療への期待と不安

講演3　太田 秀樹：出前医者が語る人生を支える医療

講演4　大熊 由紀子：日本の医療の困った「忘れもの」

第3回生存科学シンポジウム

未来への懸け橋よく生きるための倫理をひもとく

2015年12月12日(土)

一橋大学 一橋講堂

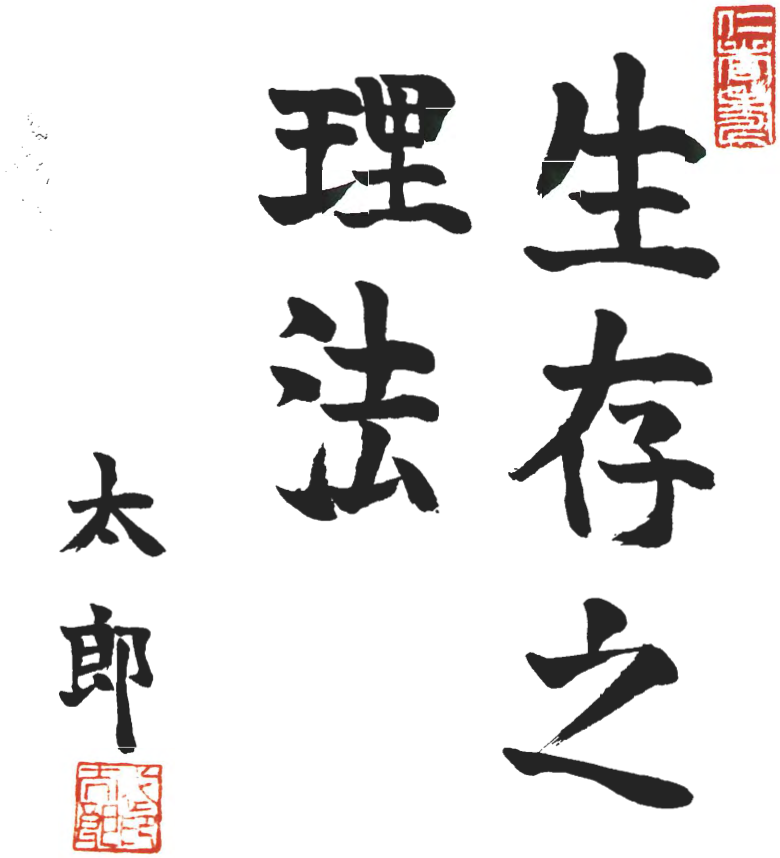
基調講演　青木 清：生命文明における生存科学

講演1　小泉 英明：21世紀の科学技術のあり方

講演2　加藤 尚武：環境倫理の過去・未来

講演3　浅野 茂隆：修復医学に学ぶ生命倫理

講演4　佐藤 雅彦：会える別れと会えない別れ



公益財団法人**生存科学研究所**

〒104-0061
東京都中央区銀座 4-5-1 聖書館ビル 303
tel：03-3563-3518
fax：03-3567-3608
http://seizon.umin.jp

公益信託**武見記念生存科学研究基金**

〒105-8574
東京都港区芝 3-33-1
三井住友信託銀行株式会社
リテール受託業務部 公益信託グループ
Tel：03-5232-8910